

価値論の研究(一)

——リカード、ベイリー、マルクス価値論

に関する学史的一考察——

尾 又 正 則

目 次

第一章 リカード「価値論」におけるベイリーの理論的視点

第二章 ベイリーの「価値・貨幣論」の展開と問題点

第三章 マルクス「価値論」の難点とその方法的課題

第一章 リカード「価値論」批判におけるベイリーの理論的視点

サミュエル・ベイリー (Samuel Bailey. 1791～1870) は、アダム・スミス (Adam Smith. 1723～1790) とダーヴィド・リカード (David Ricard. 1772～1823) を頂点とする、いわゆる古典経済学派の価値学説に対する批判者として経済学史上、大きな貢献をなした学者であった。しかし、ウィリアム・ペティ (Sir William Petty 1623～1687)

にはじまりスミス、リカードを経てマルクス (Karl Marx. 1818~1883) へと発展した価値論史を繙くとき、ベイリーは単にリカードの強力な反対者、異端者として取り扱われる傾向が多分にあることは否定できない事実である。リカードに対するベイリーの批判は、実は価値形態論の研究に大きな示唆をあたえるものであり、ベイリーの理論的功績は同時に、古典学派の理論的欠陥への指摘であると考えるべきであらう。

一八二〇年—三〇年の十年間に、リカードの理論に反対するいくつかの書物が発行されたが、ベイリーが公にした書物はその最も重要な問題提起をしたものの一つに属する。

ベイリーは、「労働が真実にすべての物の交換価値の基礎である」ということは経済学における最も重要な学説である、「商品の価値はその生産に必要な労働量によって決定される」「もしも商品に実現された労働の分量がその交換価値を左右するものとすれば、労働量の増加はつねにその加えられた商品の価値を増加させ、同様にその減少はそれを低落させなければならない。(If the quantity of labour realized in commodities, regulate their exchange value, every increase of the quantity of labour must augment the Value of that commodity on which it is exercised, as every diminution must lower it)」^①と云ったリカードの価値理論の根幹に対して反駁しようとした。すなわち、商品それ自体は一つの外的対象物として、たんに一定量の使用価値体として存在するばかりであり、そういうものとして直接に現象するものではなく、他の商品(一定量の使用価値体)との交換関係において、換言すれば交換価値としてしか現われない。いわゆる交換価値は、ある一定量の使用価値体が他の使用価値体と交換される際、なんらかの量的比率として現象する関係として現われるにすぎない。以上のように、まさしくベイリーは、かかる価値の現象形態にほかならないところの交換価値をもって価値の全てであると理解し、こうした立場をもってリカードの

価値理論の反対者として持論を展開したのである。

労働を「交換価値の基礎」と規定する立場は、ペティにはじまり、スミスを経てリカードに至る古典学派の価値学説の基本的な前提である。「商品の価値はその生産に必要な労働量によって決定される」といったこの学派の主張も、それ自体としてみれば決して誤りではない。しかし、これだけの主張では、資本主義社会にあっては全ての労働生産物が商品形態をもって必然的に展開する価値形態を説明したことにはならない。つまり、古典学派は、労働生産物を研究の対象としていながら労働生産物の商品形態そのものを無視し、労働生産物一般に対していきなり価値規定をあたえたことにより、商品価値の中味を指摘したにすぎなかったのである。すなわち、最初から商品のもつ労働的側面に無頓着であつたためにその形態の発展が必然的に展開するところの貨幣形態、資本形態への論理的発展も期待すべくもなかった、ということである。

いわゆる商品の交換価値それ自体は、単にそれだけをとってみれば、一定量の使用価値と交換される量的比率としてしか現象せず、さらにこの量的比率はたえず変動するのであるから、交換価値をこのようなものとして把握する立場をとるならば、交換価値は全く相対的なものとなると同時に進んで価値をなにか絶対的なものとする見地が支配的なものとなるであろう。いわゆる絶対価値論がそれである。ペイリーのリカード批判は、こうした基礎の上にその論理構成がとられているのである。ペイリーは言う。

「労働量が〔リカードの学説にしたがえば〕価値の原因であるからして、ある一つの商品におけるこの原因が依然として変りなければ、その結果は必ずや同じでなければならぬ。しかし労働量が価値を決めるとしても、それは比較されるそれぞれの生産に要する労働量でなければならないのであって、わずか一つの商品のみの生産に要する労働

量であつてはならない。両者の価値、すなわち相互に対する両者の関係は、どちらかに必要とされた生産労働の分量におけるあらゆる変化とともにかならず変化するにちがいない」^②以上のように相対価値論の立場で労働価値説に投げかけられる批判は、労働量によって規定される商品価値の大きさの変動が、その相対的表現である交換価値の大きさの変動と一致しない場合もありうるのだから、労働量による価値規定は、時として現実的に妥当しえないものとして労働価値説そのものを否定するのである。交換価値の概念を単なる交換比率としてだけみるならば、それは我々が日常的に経験するところであろう。ベイリーはまさにこうした価値の現象形態にはかならず交換価値をもって価値の全てであると理解し、この見地からリカードの価値論を批判しようと企てたのである。

リカードは、その『原理』(On The Principle of Political Economy and Taxation)第一章「価値論」の冒頭で「一商品の価値、またはこれと交換される他の商品の数量(The Value of a commodity, or the quantity of any other commodity for which it will exchange)」という表現を用いて労働それ自体を「交換価値の基礎」とし、商品の交換比率を決定する基準として一定の価値を想定し、その価値の大きさをその商品の生産に支出された労働の量によって規定した。その結果として周知のように「一商品の価値、またはこれと交換せられる他の商品の数量は、その生産に必要な相対的労働量に依存する」。(The value of a commodity, or the quantity of any other commodity for which it will exchange, depends on the relative quantity of labour which is necessary for its Production)^③「これら諸商品の交換価値、すなわち一商品のいくらの量が他の商品と交換にあたえられるべきかを決定する規則は、ほとんどもっぱらそれぞれの商品に費された労働の比較的分量に依存する」^④という結論が導き出されたのであった。要するに、ベイリーにあつては、たんに商品の交換比率として現象するところの交換価値そのものの変動は、

「ある一つの商品における価値の原因」であつたものが、リカードにあっては、これと交換される他の商品における「原因」との関係によって決定される、ということになる。リカードは言う。

「いまラシャ一片がリンネル二片に値いし、そして十年後にラシャ一片の通常価値がリンネル四片であつたとすれば、われわれは、ラシャを作るのに必要とされた労働が増加したか、リンネルを作るための労働が減少したか、あるいは両方ともに作用したか、いずれかなりと結論していい」^⑤。

リカードによれば、ラシャの生産に要する労働量とリンネルの生産に要するそれが共に社会的に必要な労働量として相対的に計算され、かつ比較されている。こうした想定の下にあっては、当然のこととしてラシャ労働とリンネル労働の生産力の変動にしたがつて価値の相対的表現である交換価値に変化が生じることになる。実際、生産力の変動することによって両商品の交換比率が異つた比率になるとすれば、交換価値は、ただちに變動するであらうことはリカードの言う通りである。しかし、そのことは価値量とその相対的表現とは一致する場合もあれば一致しない場合もあることを彼自ら認めていることになるであらう。それはとりもなおさず、リカード自身が価値と交換価値を混同し、両者の形態的質的規定の差異に理論的に接近しえなかつた証左であらう。だから、「かれ(リカード)は、価値は購買力を表現すると定義する点では、スミス博士に同意しているけれども、またかれの著書の最初の命題では、一商品の価値は、それと交換される他の商品の数量と同意語であると語っているけれども、しかもかれの著作の他の章ではつぎのように言っている。『わたくしは一商品の価値を、それと交換される他の諸商品の多少によって測定する点ではセー氏に同意することはできない。』と、この定義にしたがえば、このことは、一商品が、他商品を購買する力を、それが購買する後者の数量によって評価する点ではセー氏に同意することができないということの意味するのであ

⑥。というベイリーの非難がうまれるのである。

リカードは、ベイリーとは反対に、最初から商品の交換価値形態から独立に商品の価値の内実を分析したことは周知のところであり、彼はこれを「絶対価値」、「真実価値」と規定し、交換価値とは区別してあつかっていた。さらに彼は、交換価値の変動は、「絶対価値」、「真実価値」の変動、すなわち交換されるべき両商品における生産力の変動を通してあらわれるものと考えていた。こうした意味において、前掲のベイリーの展開は、リカードの理論的欠陥を指摘していると言えるであらう。

リカードは、商品の交換価値から出発しながら、価値の分析を交換価値形態において表現されているその量的側面から抽象し、これから独立して考察した。こうした方法は、リカードのみならず一般に古典経済学派に共通の特徴であるが、その結果リカードは、諸商品は労働生産物として共通の価値実体をもつものであり、それに含まれている価値実体の大きさが等しいがゆえに、諸商品は一定の量的比率をもって交換されうること明確にした。しかし、リカードを頂点とする古典派の分析視角は、ベイリーの理論的立場とは全く反対のところに位置するものであることは、これまでの論述から明らかである。リカードが言うように、商品はいずれも労働生産物であり、人間労働という共通の社会的単位の表現であるかぎりにおいて一定の価値対象性をもつものであるが、商品にとつての対象的形態はそれ自身の自然形態でなければならない。従つて、ある商品は他の商品の自然形態、換言すれば使用価値態を自己の価値形態としなければならない。だから商品の価値は交換価値形態ではじめて自らの自然形態(使用価値)と分離した独立の価値表現を与えられるのである。しかし、リカードは、人間労働の結果として得られた価値対象性は、諸商品に共通する性質のものであることを明らかにしただけで、その価値対象は諸商品に固有の自然形態とは異なったもので

あるということを分析できなかった。

資本主義社会では、労働生産物は最初から商品として現われて来なければならぬ実体的関連が存在しているとはいえないのであり、それは要するに商品をもって商品が生産される社会だからにはかならないが、この点は商品を最初から、商品になった商品として捉えさせようとする傾向を生む實際上の動機となっている点は否定できないであろう。しかしこの場合も、商品は既成の前提ではなく、生産物が商品として現象する仕方は、それが商品として現象しながらも、それが商品として売れるか売れないか、それによってこれから真に商品となるかならないか分らない、いわゆる可能態として存在しているところに、私的労働によって構成されるところの商品生産社会の、実体的関連の真の意味があるのである。そして勿論、商品が商品として現象する仕方を設定する価値形態は、かかる商品生産社会の実体的関連を事前にあたえられたものとして前提するのではなく、商品の形態的展開の論理的発展過程として把握されなければならない。そうした形態論的思考をするのでなければ商品、およびそれを生み出すところの商品生産社会の特殊歴史的な形態規定性を究明することは不可能のはずである。すなわち、商品はそれ自体、特殊歴史的規定性、換言すれば価値物として定在しているのであり、商品は価値を積極的契機としながらも、自然形態としては使用価値であり、その価値を表現するためには他の商品の使用価値体に依拠せざるをえないという商品の内在的本性たる、いわゆる商品の自己矛盾として設定されるのである。要するに価値形態は、自己を矛盾した存在として定立せしめる現象であり、商品内部の価値と使用価値との対立を外化せしめ、価値が使用価値によって、さらに使用価値が価値によって媒介されながら、しかもこの二要因が、価値によって積極的に統一されるといいう、商品のいわゆる否定的な自己媒介の道程であるといえるであろう。

リカードが商品価値の形態規定を看過した結果、一商品の価値が他商品の使用価値体で表現されるという形態的發展の途はとざされることになり、結局、彼は商品価値の実体を説明し、価値の大きさが労働量によって規定されるということを繰り返すばかりであった。諸商品の交換比率が価値によって決定され、一定の比率で互いに交換される諸商品には各々等量の労働量が含有されていることを説明したところで、それは交換価値形態へと連続する論理ではなかった。リカードが言うところの交換価値の変動は「絶対価値」、「真実価値」の変動を前提にしていることはさきにも見た通りである。しかし、それは単に価値についてその量的関係の変動をしめすだけのものであり、いわゆる価値形態の形態的展開の中で規定される価値の量的規定がいかにしてあたえられるのかを論証するものではなかった。彼は、各種の商品の生産に支出された具体的・私的有用労働を最初から一般的・社会的労働と見なし、諸商品は各々の生産に費やされた労働量で、すなわち価値通りに交換されるというふうに考えたのである。しかし、実際には、諸商品の生産に要した私的・具体的有用労働が直ちに一般的・社会的労働として測定できないが故に、一商品の価値が他商品の使用価値体で表現されるという、いわゆる「回り道」——すなわち交換価値形態——を通してはじめて一商品は自己の価値を表現しうるのである。だが、リカードは遂にそれを発見することができなかった。商品の交換価値は価値を前提し、交換価値の変動は価値の結果であると説明しても、現実的には価値の変動は交換価値の変動以外に説明されないのであるから、これは堂々巡りをくり返すばかりであった。それだからこそ、「価値は單純に、また他物との関連なしに考察された一物の属性なりとなすことはできない」^⑦「リカード氏は、一物の貨幣、帽子、上衣または穀物での価値は、名目価値にすぎない、とわれわれに語っている。するとわれわれは真実価値をいかなる商品で表現するのであろうか。かれの答えは、いかなる商品によっても表現されないということであるにちがいない」^⑧「真実価値

はリカード氏の意味では、いかなる商品との関係においても価値ではない^⑨」という非難が、ベイリーから浴びせられたのである。

最初から交換価値論を展開していながら、これを価値形態論として論理化できず、価値と交換価値を混同したところにリカード理論の根本的欠陥が内在していたのであった。ベイリーからの批判もまさにこの点にあったといえるであろう。このかぎりでは、ベイリーの理論的功績に関しても、スミス以来古典学派の一貫した理論的支柱であったところの「絶対価値」、「真実価値」さらに「不変の価値尺度」といった問題に批判の目を向けたところにあると云ってよい。すなわち、「Aという一対象物の価値は、Bというある他の対象物の数量によってのみ表現されうる。」というベイリーの規定は、Aという商品の生産に要された労働量がBのそれと等しいから等置・交換されるのだというリカードの実証的交換価値論を排除し、Aは自分自身の価値を自らの使用価値体では表現できないからB商品の使用価値体の一定の数量をもって表現するのだ、というふうに純粹な形態論への方角づけをするものであった。だから、そのかぎりにおいてマルクスはベイリーを「価値形態の分析に従事した少数の学者」の一人に数えたのである。

注

① David Ricard : On the Principles of Political Economy and Taxation. 1st ed. London. 1817. P. 13. 竹内謙二訳『経済学および課税の原理』千倉書房、昭和五十六年、一五一―一六頁。

② Samuel Bailey : A critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; chiefly in reference to the Writings of mr Ricardo and his Followers, by the Author of Essays on the Formation and Publication of Opinions, etc, etc, London, 1825, P. 13. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判——価値の性質尺度、及び原因に関する論文』日本

- 評論社、昭和十六年、三九頁。
- ③ David Ricard : On the Principles of Political Economy and Taxation. 1st ed. 邦訳一四頁。
- ④ Ibid, P. 16. 邦訳二三頁。
- ⑤ Samuel Baily : A critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value ; chiefly in reference to the Writings of mr. Ricardo and his Followers, by the Author of Essays on the Formation and Publication of Opinions, etc. etc. P. 18. 邦訳二四頁。
- ⑥ Ibid. PP. 27—28. 邦訳四五頁。
- ⑦ Ibid, P. 4. 邦訳二九頁。
- ⑧ Ibid, P. 235. 邦訳二〇〇頁。
- ⑨ Ibid, P. 237. 邦訳二〇一頁。

第二章 ベイリーの「価値・貨幣論」の展開と問題点

これまでの論述から明らかなように、ベイリーは、古典派以来の伝統であるところの価値尺度として機能する商品はその自体、絶対的価値をもつものであり、その価値は不変でなければならないという主張に対して、それを積極的に排除する立場をとるとともに価値尺度としての貨幣の機能を明らかにしようとした。すなわち、ベイリーは、交換比率として現象したかぎりでの交換価値をもって、いわゆる価値概念を規定する理論的立場から、商品の価値は現実的には貨幣としての貴金属の一定数量によって、換言すれば価格として表現され、それを通して商品の価値尺度がなされる点を強調して次のように述べている。

「帽子一箇が二〇シリングであるというときには、その帽子の価値は銀の数量によって表現されていることは明らかである」^①

「いわゆる価値測定過程においては、道具は全く用いられない。したがって……不変という性質が帰せしめられるところのもの、またそれが主張せられるところのものは絶対になにも存在しない。この過程における必要な条件は、測定されるべき諸商品が共通の名称に還元されるということである。共通の名称にはいつでもひとしく容易に還元されよう。あるいはむしろ還元されている。けだし共通の名称とは記入されている諸商品の価格、すなわち貨幣にたいするそれらの価値の關係にはかならないからである」^②

彼は右のように述べて、商品の価値の尺度を絶対価値論を根底におきながら不変の価値尺度を想定しつつ物の長さや重さを測定する秤や物差のように理解していたリカードを頂点とする古典学派の主張を批判している。さらにベイリーは価値尺度として現実機能する貨幣が価値において不変である必要はないことを次のように展開している。やや長くなるが精確を期するために引用しよう。

「じつさいアダム・スミス以来今日まで教えられてきたところによれば、貨幣が十分な価値尺度たるためには、それ自身の価値において不変たるべきであること、あたかも一フートが長さの十分な尺度たるためには、それ自体の価値において不変たるべきであるのと同じである、といわれている。しかしこの学説は混同された種々の觀念から生ずるものである。——貨幣はたえず変動しうるものであるが、しかも価値がまったく変動しないものであるかのよう十分な価値の尺度となりうる。たとえば貨幣がその価値において減じたとしよう。また価値の減少は、ある一商品または多数の商品との關係における価値の減少を意味するものであるから、貨幣は穀物と労働との關係における価値を

減じたものとしよう。価値減少の前には、一ギニーは三ブッシェルの小麦または六日分の労働をかうであらうし、その後には二ブッシェルの小麦または四日分の労働をかうであらう。このいずれのばあいにも、小麦および労働との関係があたえられているならば、それら相互の関係は推論されうる。すなわちわれわれは、一ブッシェルの小麦は二日分の労働に値することをたしかめることができるのである。このこと——価値を測定するというのは、ひっきようこのことを意味するにすぎない——は、価値減少後においてもそれ以前におけると同じように容易になしとげられる。あるものが価値の尺度としてすぐれているということは、それ自身の価値が可変であることはまったく無関係である」③

周知のように貨幣商品・金銀の価値が変動すれば、かりに諸商品の価値それ自体に变化がない場合でも金で示された諸商品の価格は変動することになるが、金の価値変動は諸商品に対して等しく影響をあたえるのであるから他の事態が不変であるならば、諸商品相互の価値比率には何の变化も発生しないであらう。けだしペイリーが仮定した例によると、貨幣の価値が減少したことによって、一ギニー貨でもって、はじめ三ブッシェルの小麦を購買していたのが二ブッシェルに減じたとしても三対六の比は二対四と同じであり、「一ブッシェルの小麦は二日分の労働に値することをたしかめることができる」のであって、その事態には何の变化もないからである。

正当にもペイリーは、貨幣価値の変動は、価値尺度としての貨幣の機能をさまたげるところか、貨幣商品・金はそのようなものとして商品の価値を尺度しつつ機能するものと述べている。いわゆる貨幣形態があたえられると全ての商品は自らの価値を共通に貨幣商品の一定量、すなわち価格として表現することになる。換言すればペイリーが言うように、「価値を測定すること」は、「この商品の相互の関係を第三の一商品にたいするそれらの個々の関係によって見い出すことである。価値を評価することは価値を表現するのと同じことである」ということに他ならない。ペイリ

いは、こうも言っている。

「帽子一個が二十シリングであるというときには、その帽子の価値は銀の数量によって表現されているということ
は明らかである」^④と。

リカード価値論の矛盾——労働量によって商品価値が決定されるという事態と一般的等価物によってあらゆる商品の価値が表現されるという現象との矛盾——が、ベイリーによって根本的に批判されたと見てよいであろう。だから、ベイリーがリカードに対して向けた「かれ（リカード）は、じつはまったく異った二つの概念を混同している。すなわち諸商品の価値を測定することと、どの商品において、またどの程度に、価値の原因が変動したかをたしかめることを混同しているのである」^⑤という非難は、一定の説得力をもっていると言える。

ベイリーは、諸商品は価格形態を通してはじめてそれらの価値を比較計量されるものと規定し、単に商品価値の实体をなす労働をもって価値を計量する尺度と考えたスミスやリカードに批判の矢を向けたが、まさにここにベイリーの優れた点があると言ってよい。交換価値形態を單純に等価値・等労働量交換として展開した古典学派に対して純粹に形態を通して価格形態に接近したベイリーの非凡さは経済学史上、大きな貢献をなすものであった。

だがしかし、彼の価値形態の分析は、決して貨幣形態の必然性を明らかにしたのではない点を我々は注意しなければならぬ。

周知のように、スミスは貨幣の発生を説くとき、物々交換を原則とする商品交換にたいし、それを媒介する手段——すなわち、交換に付随する外部的事情——によって説明したにすぎなかった。こうしたスミスの方法は、貨幣の必要性を説くことはできて、価値形態の形態的發展が必然的にもたらずところの「貨幣の必然性」を説くには至ら

なかった。

ベイリーは言う。

「価値を測定するという章句に付されるべき唯一の意味は、……第三の対象物に対する二対象物の個々の関係によって、あるいは、換言すると共通の言葉または名称にそれらの価値を表現されることによって、われわれのなしうるそれらの価値の比較だけである」^⑥。

「いわゆる価値の測定の過程においては、道具はまったくもちいられてはいないのであり……この過程における必要な条件は、測定されるべき諸商品が共通の名称に還元されるということである。共通の名称には、いつでもひとしく容易に還元されうるであろう……けだし、共通の名称を記入されている諸商品の価格、すなわち貨幣にたいするそれらの価値の關係にほかならないからである」^⑦。

見られるように、ベイリーはせっかく価値実体論を離れたところで形態論を展開させながら、貨幣の存在を單なる常識的、現象的事実として把握しているにすぎない。彼が言う「価値の測定」というのは、「共通の名称を記入されている諸商品の価格、すなわち貨幣にたいするそれらの価値關係」にすぎないものであり、「価値」の「尺度」は、単に貨幣を前提とした「共通の名称」、換言すれば価格による共通表現でしかない。しかも「共通の言葉」、「名称」による表現自体も、道具をまったく必要としないものであるから、現実の貨幣は「すぐれて比較の媒介物」ではあつても、商品である必要性はないことになるであらう。

「金が銀の一五倍の価値をもっているといわれるのは、一オンスの金が、いかなる原因からにせよ、一五オンスの銀を支配するであらうからである」^⑧。

ペイリーの貨幣論の問題点はここにあると言ってよい。彼の言う「共通の言葉」は単に、オンスという度量呼称だったのである。これでは何故多数の商品の中から必然的に金商品が貨幣の位置を占めるに至ったのが説明されえないであろう。と同時に、価値の量的比較さえ不可能となるはずである。彼の方法は、交換価値そのものを交換されるべき相互の商品の使用価値体の量的比率とする相対価値論を如実に表わすものでしかない。さらにそれは、商品交換そのものが使用価値への相互的欲望にもとづいた交換関係として理解されており、いわば相互的な欲望充足のための物々交換にならざるをえず、価値表現の貨幣表現への必然性は看過されており、貨幣は単に物々交換を阻害する外的事情から説明されざるをえないことになる。要するに貨幣は、各自が相互に自らの欲望に基き求めあう種々異なる使用価値体を単に媒介する手段に解消されてしまっているのである。さらに進んで、こうした相対価値論を徹底すると、貨幣はもはや何か無用の長物と化することになる。ペイリーは、交換価値を説明する際、「価値は絶対的または内在的なものを指すのではなくて、二つの対象物が交換されうる商品として相互に対立する関係をさすにすぎない」^⑨という程度にしか理解してなかった。続けて彼が、「Aの価値はそれと交換されるBの数量によって表現され、Bの価値は同様にそれと交換されるAの数量によって表現される」^⑩と言うとき、価値の相対的表現は単なる相互的表現にすりかえられてしまっていると見るべきであろう。貨幣形態をすでに前提された自明のものとみなし、単に二商品の交換関係から交換価値を説き、日常見られる価値形態を当然のものの如く受け取っていたペイリーは、「Aの価値はBの価値にひとしいと語るさいには、われわれはこれらの商品の他の商品に関する関係を、とくに貨幣に対する関係をたえず顧慮して、この表現を用いているのが見いだされるのであって、われわれの言葉は、それを敷衍すれば、AとBは第三の商品に、または商品一般にたいしてひとしい関係にたっているということである。」と言って自らの理論的

立場をさらに徹底せしめている。たしかに彼が言うように、商品Aと商品Bは各自の価値を「第三の商品または商品一般」に等しいものとして、相互にその価値が量的に比較されてはいる。しかし彼は、この「第三の商品、または商品一般」がいかにして成立するかを説いてはいない。さらに続けて彼は、「商品の価値は、他のある商品との交換の関係を指すのであるから、われわれはこれを、それが比較される商品にしたがつて、貨幣価値、穀物価値、ラシャ価値とよぶことができる」と言っている。彼によれば、「貨幣価値」が、いわゆる一般的商品である穀物やラシャとともに同じ等価値態に並ぶことになっており、諸商品が自らの価値を「第三の商品または商品一般」——すなわち貨幣商品——において統一的に価値表現する形態的・論理的必然性が全くあたえられてない。彼にあっては、交換価値は価値形態として把握されておらず、単なる諸商品相互の交換関係程度にしか理解されていなかったのである。要するに、「第三の商品または商品一般」とは、価値形態の発展の結果、相対的価値形態から論理必然的に排除された貨幣商品・金であり、彼はそれを一般的等価物として理解していなかったということである。とにかく使用価値への相互的欲望にもとづいた交換関係として商品交換が把握されている点は、くれぐれも注意すべきところであろう。「価値は二つの対象物が交換されうる商品として相互に対立する関係を指す」ものであるとするならば、一般的等価物としての位置にある商品は、また同時に相対的価値形態として位置することができることになる。まさにベイリーの貨幣論は、その馬脚をあらわしたと言つてよい。

ベイリーの貨幣に対する認識は、彼の『貨幣論』(Samuel Bailey, *Money and its Vicissitudes in Values*, 1837)で一層明白になっている。

「尺度という言葉は量を比較するための尺度である。そして価値尺度という言葉は、われわれが市場においてたぶ

ん直接には交換されないところのAとBという二つの商品の価値を比較せしめることを可能にさせるものを指す」¹³
「貨幣は諸商品を交換させる媒介物であり、あるいは新しい言葉で言えば、それは偉大なる中間的商品である」¹⁴
「貨幣が一般的な中間の商品、すなわち、市場において他の諸商品を獲得するために使用されるものであるという事情から、それは当然に契約の一般の商品となる。すなわち、将来のある時期に完成されるべき大多数の財産取引がそれによってなされるところのものとなる。」¹⁵

「貨幣が一般的な中間の商品であるという事情からして貨幣は契約の一般的商品となるばかりでなく、価値尺度であるということは、一般的に使用される中間的商品に必然的に付随するものである。——この命題は、それを説明する際、多くを語る必要がない」¹⁶。

見られるように彼は、貨幣を「一般的な中間の商品」・「諸商品」相互を「交換させる媒介物」と規定しているが、これは、彼が貨幣そのものを日常の現象的な商品流通の自明の前提的事実として把握していることに由来しているからであると言ってよい。しかも彼は、貨幣の価値尺度機能そのものを購買手段の機能に「付随」するものと規定し、さらにこれを「契約の一般の商品」、すなわち支払手段としての貨幣の機能と同一視している。結局のところ彼にあっては、「貨幣」は単に「諸商品」を「交換」させる「媒介物」でしかなかったのである。その意味において、ペリーの貨幣論は、スミスの貨幣論に非常に近似するものであると言ってよい。

マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766—1834) は、「ペリーの方法論を評して「価値という術語を、この著者が解する意味で用いるのはまったく余計なことである。それは価格という術語とまさしく同じ意味である」¹⁷と鋭く指摘している。スミスからペリーへの理論的展開が、交換価値をただ単に使用価値の側面からだけ思考したとすれ

ば、リカードの方法は、使用価値の側面が捨象され人間労働による実体的規定のみをもって交換価値を規定した点に大きな特徴がある。すなわち、リカードは、交換価値をもつばら抽象的人間労働の量的比率として見るばかりであり、一商品の使用価値が他商品の使用価値と交換される際の量的比率は、「生産に必要な相対的労働量によって決定される」と主張するのであるから、交換価値は生産に必要な労働（抽象的人間労働）から現象するかのような観を呈することになる。したがって、諸商品は、それ自体に抽象的人間労働が対象化されていることをもって直ちに他商品に対する購買力があたえられるのであるから、相対的価値形態から排除された特定の貨幣商品を等価形態として設定する論理的必然性は全くなくなるであろう。すなわち、抽象的人間労働を対象化された諸商品は、すでに購買力をあたえられているのであるから相互に欲望する商品を、貨幣商品の媒介なくして交換できることになる。

リカードは言う。

「通貨は、それがまったく紙幣からなるばいに、ただしそれが代表すると称する金とその価値をひとしくする紙幣からなるばいに、そのもつとも完全な状態にあるものである」¹⁸。

リカードによれば、交換を媒介する手段は、貨幣どころか紙幣でもよいことになり、貨幣は紙幣として「もつとも完全な状態にある」からもはや、それは商品流通に必然的な存在ではなくなるわけである。従って貨幣は不要のものとなる。しかしこの貨幣不用論は、リカード価値論の必然的帰結であった。けだし、我々が繰り返し展開してきたように彼は、商品の価値が他商品の使用価値体（自然形態）によって媒介されることを無視して、投下労働が直ちに商品に購買力をあたえる如くの価値論を主張することによって貨幣による商品流通を看過し、何か物々交換が本来的なものであるかのような結論を下したからである。その意味で、リカードの価値論が、貨幣の必然性、さらに貨幣商品

の価値性格を究明しえず、単なる紙幣論に墮していかざるをえなかったこの論理過程は、価値形態論の欠如を如実に物語る過程でもあったわけである。

結局のところ、リカードもまた——その方法論こそは異なるが——ベイリーとともに相対価値論を展開したにすぎなかった。ベイリーは、主観的価値論の立場から、またリカードは、客観的価値論（労働価値説）の立場から共に相対価値論を主張したわけである。

注

- ① Samuel Bailey, *A critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; chiefly in reference to the Writings of Mr. Ricardo and his Followers, by the Author of Essays on the Formation and Publication of Opinions, etc., etc.* London. 1825, P. 26. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判——価値の性質、尺度、及び原因に関する論文』日本評論社、昭和十六年、四四頁。

② *Ibid.*, P. 112. 邦訳一〇九頁。

③ *Ibid.*, PP. 9—10. 邦訳一二頁。

④ *Ibid.*, P. 26. 邦訳四四頁。

⑤ *Ibid.*, PP. 121—122. 邦訳一一五頁。

⑥ *Ibid.*, P. 104. 邦訳九一頁。

⑦ *Ibid.*, P. 112. 邦訳九八頁。

⑧ *Ibid.*, P. 114. 邦訳一〇二頁。

⑨ *Ibid.*, PP. 4—5. 邦訳二九頁。

⑩ *Ibid.*, P. 27. 邦訳四五頁。

- ⑪ Ibid., p. 8. 邦訳三二—三三頁。
- ⑫ Ibid., p. 10. 邦訳三三頁。
- ⑬ Samuel Bailey: *Money and its Vicissitudes as they affect National Industry and Pecuniary Contracts*. 1837. P. 4.
- ⑭ Ibid., p. 2.
- ⑮ Ibid., p. 3.
- ⑯ Ibid., p. 3.
- ⑰ Thomas Robert Malthus: *Definitions in Political Economy, preceded by an inquiry into the rules which ought to guide political economists in the definition and use of their terms; with remarks on the deviations from these rule in their writings*. London. 1827. 玉野井芳郎訳『経済学における諸定義——経済学者の用語の定義と用法とについて彼らを導くべき基準の研究を前置きとし、彼らの著作におけるこれらの基準からの逸脱にたいする評論を付す』岩波文庫、昭和三十三年。

第三章 マルクス「価値論」の難点とその方法的課題

「価値形態の分析に従事した少数の経済学者」の一人といわれたベイリーは、同時にマルクスによって「何の成果もあげえなかった」と批判された。マルクスがベイリーを論難する根拠は、彼が労働価値説を否定し、現象的な相対価値論に終始した点に向けられた。

マルクスは言う。

「われわれが、ある物の交換価値について語るばあいには、交換価値をもちろん第一に、一商品と交換されうる他

の各商品の相対的数量と理解する」^①

「けれども一そう詳細に考察すれば、われわれは次のことを見いだすであろう。すなわち、ある物が、それと何ら共通なものをもたぬ他の物——両者のあいだには自然的その他の類似点があっても、それらは交換においては考慮にはいらない——の無数の数量と交換されるところの關係が一定のものであるとすると、そのばあいにはこのすべての相異った異質物が、同一の共通な統一体の、物の自然的存在または現象とは全然異なる一要素の、比例的表示、表現として、考察されねばならない。」^②

「両者」のあいだには「自然的」その他の「類似点」はあっても「交換」においては「考慮」にはならないというマルクスの論述は、まさに古典派以来の伝統である交換価値概念の延長線上にあるものといつてよい。すなわち、それは、相異なる二つの使用価値体を、両者に共通の第三者——対象化された抽象的人間労働——に集約し、そこから交換価値とは区別された価値をみちびきだすリカードの論理・絶対価値論にほかならない。マルクスは、相異なる二つの使用価値体が、交換可能形態として相対的価値形態と等価形態というかたちで等置される以上、両者にある共通の内実、等一物がなければならぬとして、次のようにベイリーを批判する。

「ベイリーはリポンドのリンネル・エポンドの麦ワラというばあいに、リンネルと麦ワラという不等なもののだの等式が両者をひとしい大きさにするという簡単な反省さえも忘れている。こうした、ひとしいものとしてのそれらの定在は、麦ワラおよびリンネルとしてのそれらの定在とはたしかに異ならねばならない。両者が等置されるのは、麦ワラおよびリンネルとしてではなく、等価としてである。だから等式の一項は他項と同一の価値を表現しなければならぬ。したがって麦ワラおよびリンネルの価値は、麦ワラでもなくリンネルでもなくて、両者に共通な、そ

して麦ワラおよびリンネルとしての両者と異なったあるものではなくてはならない。それは何か？ 彼はこれに答えていない^③

「両者」が、「等置」されるのは、麦ワラおよびリンネルとしてではなく「等価」としてであり、両者と異なった「あるもの」でなければならぬとマルクスは言うが、これはすなわち、両者の相異なる使用価値体を拾象して両者に共通な第三者・価値実体（抽象的人間労働）抽出の論理以外の何物でもない。

「Aの価値をBにおいて度量するためには、Aが、Bにおけるこの価値の度量とは無関係に、ひとつの価値をもたなくてはならない。そして両者は、両者のおのおので表現される第三のものにひとしくなくてはならない」^④

マルクスによれば、二商品の交換関係で表現するところの価値は、両者に共通な第三者である。すなわち、一方の商品Aの価値は他方の商品Bの使用価値体で表現されると同時にその逆関係も成立することになる。故に、「共通」なるものは、A、Bという相異なる使用価値体の量的関係のなかにあらわれることになる。しかし、ペイリー批判におけるこうしたマルクスの発想は、まだこの段階では彼自身、価値表現を価値形態として構成しようとする理解に至ってなかったことの証左であると思われる。価値表現において、等価形態に位置する商品は自らの使用価値（自然形態）をもって相対的価値形態に立つ商品の価値を表現する材料として機能するだけで、自らの価値を表現する立場にはないのである。すなわち、等価形態にある商品は同時に相対的価値形態に立つことはできないということである。

自己の商品価値を積極的に表現しようとする立場が相対的価値形態であり、その価値表現において受動的な立場にあり、かつ価値表現の材料とされる立場が等価形態である。この両者は、価値表現の内部で、相互に牽引し合いかつ反発し合う、価値表現の両極である。この価値表現の内部において等価形態にある商品は、価値存在として積極的に

相対的価値形態にたつ商品との交換にはいろいろな立場にある。しかしこれは、等価形態にある商品が相対的価値形態に立つ商品の価値表現の受動的材とされている関係をはなれて、自ら価値として積極的に、相対的価値形態に立つ商品との交換にはいろいろなのではないことは言うまでもないことである。すなわちそれは、それ自体としては単なる使用価値（自然形態）でしかない相対的価値形態にある商品が、自らを一定の価値として定立せしめるために、等価形態にある使用価値体を自らの価値存在として定立せしめる過程に他ならない。この事態は、それ自体としては単なる使用価値であるものが、自らを積極的に価値として表現させねばならないという商品に内在している矛盾の外的表現と言えるであろう。価値形態は、商品の価値性格を積極的要因とし、その使用価値性格を消極的要因とし、この内部対立を価値によって積極的に統一せしめる論理過程を表現するものでなければならぬ。

リカードを頂点とする古典学派以来、交換価値論を論ずる時、価値形態に内在する消極的要因であるが重要な役割を果す使用価値そのものを捨象して議論されてきたことは、疑いえず事実である。換言すれば、それは、商品そのものを、自己の内在的矛盾を価値によって積極的に統一しつつ、これから商品になるべきものとして把握せずに、日常的な流通過程に現象するところの、すでに商品に成ったもの——価値によって積極的に統一された結果としての商品——として、単純に抽象的に理解しようとするものに他ならない。

「麦ワラ」および「リンネル」といった特殊の使用価値を捨象し、「両者」に「共通」の価値対象性を求める方法は、絶対価値論を根拠にして相対価値論を展開するリカードに追隨するものである。マルクスは、ベイリーの価値形態論に価値概念——すなわち、価値実体論から成る等労働量交換——が欠如していることをもって批判の対象とした。しかし、こうしたマルクスの理論的立場は、古典派価値学説への回帰以外の何物でもないことは誰の目から見ても

も明らかであろう。

他方においてマルクスは、「価値としてのそれらの定在は、それら自身の使用価値——使用価値としてのそれらの定在——においては表現されない。これは、他の使用価値におけるそれらの表現において、すなわち、それらとこの他の使用価値が交換されるところの関係において、あらわれるのである」^⑤と述べて価値表現において使用価値の果すその経済的役割に言及している。正しくも彼は「価値」は他商品の「使用価値」で表現されることを指摘している。しかしそれはマルクスの論理に一貫して流れている古典派以来の絶対価値論の論理——交換される諸商品に投下・対象化された労働の量的関係のなかで商品の交換価値が現象するという事態——に埋没してしまっていると言える。ただし、マルクスはベイリーを非難すべく、周知の「簡単な幾何学上の一例」をもって次のように言っているからである。

「私が三角形Aの面積は四角形Bのそれとひとしいというときは、三角形の面積が四角形において、また四角形の面積が三角形において表現されているということを意味するだけでなく、その意味するところは、むしろつぎのことである。三角形Aの高さがHにひとしく、底辺がGにひとしいとすると、 $A = \frac{H \times G}{2}$ ということが三角形にあたえられた属性であるのは、同様に、 $B = \frac{H \times G}{2}$ が四角形にあたえられる属性であるのと全く同じだということである。

……もしも幾何学が、ベイリー氏の経済学と同様に、三角形と四角形との同等性は三角形か四角形において、また四角形が三角形において表現されることを意味するというだけで満足しているとすれば、それはすこしも進歩しないであらう」^⑥

相対的価値形態に立つ商品と等価形態に位置する商品に同量の抽象的人間労働が対象化されている場合には、両者

が共通の価値として等置され、相互に同一の価値表現をするということを論証するために、マルクスは、三角形の面積が四角形で、四角形の面積が三角形で表わされるためには、その前提として両者が面積において同一でなければならないという幾何学上の手法をもって説明している。

しかし、交換価値、価値形態を論ずる時、「簡単な幾何学上の一例」をもってすることにどれだけの意味があらうか。価値表現の前提として商品価値の同質性を論証するためにマルクスが持ち出したこの「一例」は、相対的価値形態と等価形態の相互連関性、互いに反発し対立する性質をどれほど科学的に論証しうるであらうか。答えは否である。

相対的価値形態・商品AⅡ等価形態・商品Bという価値方程式において、等価形態におかれた商品Bは、その自然形態である使用価値として、そのまま相対的価値形態に立つ商品Aの価値を表現し、直接的に価値の定在——直接交換可能性をもつもの——としての地位をあたえられる。商品が自らの価値を表現しようとする場合、自ら相対的価値形態に立ち、自己の欲する一定量の使用価値を等価形態に置かねばならない。この際、B商品がA商品の等価形態に置かれるのはB商品を主とした関係ではなく、商品としてのAを主にした、いわばA商品をとおしてみた商品の自己関係の表現としてなのである。いわばB商品の等価存在はA商品の反省規定ともいえるであろう。つまりそれは、A商品というある商品をとおして商品の商品関係としてのいわば自己反省の過程にほかならず、商品Aと商品Bとの関係は、いずれが主になってもかまわないというものではない。しかもそれが商品Aを通しておこなわれる商品の自己反省として定立されることになる。換言すれば、等価形態にある商品Bは、相対的価値形態に立つ商品Aの契機として存在するわけである。

等労働量交換から成る交換価値論を展開したリカード、そしてその延長線上で相対価値論を説いたマルクスに対して、既知のようにベイリーは、日常の流通過程に現象する——価値実体論ぬきの——相対価値論を主張したのである。各々、方法論が異なるが故に相互批判を繰り返したが、結局結論は同一の次元のものであったように思われる。では一体、古典派経済学説を批判的に接取し、ベイリーの「価値形態論」を発展的に止揚したはずのマルクスが何故、古典派理論と同次元の結論に達したのか、次にこの点を究明しなければならない。

マルクスは言う。

「いまもし商品体の使用価値を無視するとすれば、商品体に残る属性は、ただ一つ、労働生産物という属性である。⑦」「もはやそれは指物労働の生産物でも、建築労働や紡績労働やその他にか一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用なる性質とともに、その中に表わされている労働の有用なる性質は消失する。したがってこれらの労働のことになった具体的形態も消失する。もはやそれらは相互に区別されることなく、ことごとく同じ人間労働、抽象的人間労働に整約される。⑧」

「我々はいま労働生産物の残りを調べてみよう。もはや、妖怪のような同一の対象性以外に、すなわち、無差別な人間労働の、換言すればその支出形態を考慮することのない、人間労働力支出の、単なる膠状物というものの以外に、労働生産物から何物も残っていない。これらの物は、ただなおその生産に人間労働力が支出されており、人間労働が累積されているということを表わしているだけである。⑨」

「ある使用価値の価値の大きさを規定するのは、ひとえに、社会的に必要な労働の定量、またはこの使用価値の製造に社会的に必要な労働時間にはかならないのである。個々の商品は、このばあい要するに、その種の平均見本にさ

れてしまう。同一の大きさの労働量を含む商品、または同一の労働時間に製造されうる商品は、したがって同一の価値の大きさをもっている」。「ある商品の価値の他の商品のそれぞれの価値に対する比は、ちょうどその商品の生産に必要な労働時間の、他の商品の生産に必要な労働時間に対する比に等しい。価値としては、すべての商品は、ただ凝結せる労働時間の一定量であるにすぎない」^⑩

以上の引用からも明らかなように、マルクスは、社会的実体としての商品の価値を分析して、「商品体の使用価値」を「無視」とすると商品体に残る「属性」は、「労働生産物」という「属性」だけであり、労働生産物の「有用なる性質」とともに、「労働の有用なる性質」も「消失」し、労働のことになった「具体的な形態」も「消失」するものと規定している。同時に彼は、それらはもはや相互に「区別」されることなく、ことごとく「抽象的人間労働」に「整約」されると述べて、さらに「商品の価値実体」は、「人間労働力」が支出された「膠状物」、「累積」された「人間労働力そのものだ」と言うのである。マルクスにあっては、「ある商品の価値」の「他の商品のそれぞれの価値」に対する「比」は、ちょうど「その商品の生産に必要な労働時間」の、「他の商品の生産に必要な労働時間」にたいする「比」に「等しい」という結論に達することになる。だから、「価値としては、すべての商品は、ただ凝結せる労働時間の一定量であるにすぎない」。(Als Werte sind alle Waren nur bestimmte Ma Be festgeronnener Arbeitszeit)」ということになる。

ここに我々は、古典派以来の抜き難い絶対価値論の伝承をマルクスに見るのである。では、マルクスにおいて絶対価値論は、いかに展開されているのであろうか。

周知のようにマルクスは、価値形態を展開する際、「一商品の単純なる価値表現が、二つの商品の価値関係にかく

されているかということを見つけ出して「ために」は、「価値表現」を、まずその「量的側面」からまったく「独立」して「考察」しなければならない、したがって二〇エレのリンネルⅡ一着の上衣という価値等式の基礎には、一着の上衣Ⅱ二〇エレのリンネルという関係——二商品の等置関係——が前提されていると述べて次のように言う。

「上衣が価値物としてリンネルに等しいとされることによって、上衣にひそんでいる労働は、リンネルにひそんでいる労働と等しいとされる。さて上衣を縫う裁縫は、リンネルを織る機織とは種類のちがった具体的労働だが、しかしながら、「機織に等しいと置かれるということは」、「裁縫を、実際に両労働にあつて現実同一なるもの」に、すなわち、「両労働に共通な人間労働」という「性格」に「整約」するのである、と。このようにマルクスは、一商品の単純な価値表現において、二つの商品のあいだの「同等性関係」としての「価値関係」を強調しているわけで、「価値関係」Ⅱ「共通な人間労働」を基礎にして価値表現を説いている。すなわち、リンネルの価値が上衣で表現されるならば、当然、上衣の価値もリンネルで表現されることになる。だから彼が言うように「リンネル二〇エレⅡ上衣一着または二〇エレのリンネルは一着の上衣に値するという表現は、上衣一着Ⅱ二〇エレのリンネルまたは一着の上衣は二〇エレのリンネルに値するという逆関係を含んで^⑪いる。」ということになる。しかし、これでは相対的価値表現は単なる相互的価値表現に等しいものになってしまうであらう。「上衣の価値を相対的に表現するためには、方程式を逆にしなければならぬ」とマルクスは言うが、方程式を逆にしてはダメである。彼も言うように「二つの質的に等しいと置かれた商品」は、「同一の役割を演ずるものではない」、ただ「リンネルの価値」のみが「表現される」からである。リンネル二〇ヤールⅡ上衣一着という方程式は、リンネル所有者が自分の欲する一着の上衣に対してリンネル二〇ヤールを交換に提供しようというものであり、この場合、上衣所有者はこの関係の中には存在しない

と考えるべきである。けだし、この方程式は等価値形態にある上衣商品の価値表現ではなくリンネル商品の価値表現であり、上衣は、まさに価値表現の「材料」ではないからである。だから、この方程式が「上衣一着 \parallel リンネル二〇ヤール」という「逆関係」をも「含んでいる」ことなどともありえない事である。

しかしマルクスは、他方で

「相対的価値形態と等価値形態とは、相関的に依存しあい、相互に条件づけあっていて、きり離すことのできない契機であるが、同時に互いに排除しあう、または相互に対立する極位にある。すなわち同一の価値表現の両極である」^⑫と述べ、さらに「二つの質的に等しいとされた商品は、同一の役割を演ずるものではない。ただしリンネルの価値のみが表現されるのである」^⑬と明確に言っている。もし彼の言う通りならば、「リンネル二〇ヤール \parallel 上衣一着」を逆転した場合、「上衣一着 \parallel リンネル二〇ヤール」である必然性は全く生じないはずである。この場合、上衣所有者は交換に亜麻布三〇ヤールを欲するかもしれないし、それとは全く異なった商品を要求するかもしれない。またま偶然的に上衣一着 \parallel リンネル二〇ヤールという関係が成立したにせよ、上衣商品の価値表現は、「逆関係」ではなく全く別個の方程式である。すなわち、所与の方程式内部で相対的価値形態が同時に等価値形態ではありえず、またその逆もそうである。価値方程式は、両辺に抽象的人間労働が対象化されていることをもって成立するというものではない。もし、等価値——等労働量——交換をもってこの式が成立するといふのであれば、それは価値形態論ではなくて単なる交換価値論にすぎない。

価値表現におけるリンネル商品と上衣商品との関係は、リンネル商品の所有者が自分欲する一着の上衣に対して、リンネル二〇ヤールを交換に提供しようというものであった。したがって、リンネル二〇ヤール \parallel 一着の上衣と

いう方程式は、逆関係、つまり上衣一着 \parallel リンネル二〇ヤールという関係を含まないのは当り前のことである。

マルクスは、価値表現を論ずる際、抽象的人間労働の等価関係、すなわち、両辺の商品に等量の人間労働が対象化されている事態を基礎に置いて論理展開したために、本来、「同じ役割を演ずるものではない」はずの相対的価値形態と等価形態の対立関係が全く看過されることになってしまった。

彼は、価値表現における「転倒の論理」を論証するために酪酸と蟻酸プロピルの分子式——すなわち、その自然科学的類似性——を援用して次のように言う。

「酪酸は蟻酸プロピルとはちがった物体である。しかし、この両者は同一の化学的実体——炭素（C）、水素（H）および酸素（O）——から、しかも同一の割合の組成、すなわち、 $C_4H_8O_2$ から成り立っている。そこで、もし酪酸に蟻酸プロピルが等しい関係に置かれるとすれば、この関係においては第一に蟻酸プロピルは単に $C_4H_8O_2$ の存在形態とされ、第二に酪酸もまた $C_4H_8O_2$ から成り立つということがいわれるであろう。こうして、蟻酸プロピルを酪酸と等置することによって、その化学的実体は、その物体の形態と区別して表現されるであろう」^⑭

しかし、自然科学的事例を用いて分子量の実体的・量的等置を説明したところで、この分子式の性格上、その右辺と左辺との対立はありえない。マルクスがいみじくも言っているように、「相対的価値形態」と「等価形態」とは、相互的に「依存」しあい、交互に「条件」づけあっている、離すことができない「契機」であるが、同時に相互に「排除」しあうはずのものである。上例の自然科学における「一例」の分子式の両辺は、相互的に「依存」しあい「排除」しあう関係にあるわけではない。もともと性格の異なる価値方程式と分子式を同一の次元で語るところに問題があると言わねばならない。いわゆる「転倒の論理」を自然科学的事例をもちだして説明すること自体がナンセン

スである。

リカードを頂点とする古典学派以来の「絶対価値論」を基礎に置き、価値形態論をそのまま価値実体論、単なる交換価値論（物々交換）と理解し、左辺と右辺の等労働量交換をもって直ちに価値表現とするマルクスの方法は、次のような如何ともし難い論理的欠陥を露呈することになる。

彼は、価値表現において両辺にある商品になんらかの生産力・価値関係の変化が生じた場合を前提として次のように言う。

「リンネルの価値は不変であつて、上衣価値が変化するばあい。この事情のもとでは上衣の生産に必要な労働時間が例えば羊毛剪截が不要となつたために、二倍になつたとすれば、われわれはリンネル二〇エレ^⑮上衣一着という式のかわりに、いまではリンネル二〇エレ^⑮上衣二分の一着という式を得る。」

二分の一着の上衣に使用価値がないことは子供でも分ることである。半分に切り裂かれた上衣を売る商人がいるだろうか。またこれを買う顧客が果しているだろうか。リンネル商品の所有者にとっては、單純にその所有する二〇エルの価値を表示するのが問題なのではない。上衣一着に対してならば幾エレのリンネルを提供したらよいかが問題なのである。上衣が価値物としてあるのもリンネル商品の所有者の欲望の対象とし等価物とされているかぎりでの事態である。一着の上衣の需要に対してリンネル二〇エレを供給しようというのである。二分の一着の上衣はもはや商品として欲望される対象ではない。欲望の対象ではない使用価値はもはや商品でも使用価値でもない。二分の一着の上衣には、もはや上衣としての価値性格は失なわれているのであるから雑巾として使うぐらいしか使い道はないと思われる。

スミス、リカード、ベイリーが価値形態論を論理的に展開できなかったように、古典派以来の伝統的「絶対価値論」に依拠しつつ自説を展開したマルクスの方法は、「貨幣形態」論証の道を閉ざすものであった。

これ以下は他日を期したい。

注

- ① K. Marx. Theorien über den Mehrwert, Bd III. S. 151. 岡崎次郎他訳『剰余価値学説史』国民文庫、昭和二十九年(乙)二二八頁。
- ② Ibid. S. 151. 邦訳(乙)二二八頁。
- ③ Ibid. S. 148. 邦訳(乙)二二五頁。
- ④ Ibid. S. 151. 邦訳(乙)二二九頁。
- ⑤ Ibid. S. 149. 邦訳(乙)二二六頁。
- ⑥ Ibid. S. 171. 邦訳(乙)二五五—六頁。
- ⑦ K. Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 42. 邦訳の頁数は、青木書店版に拠っている。但し、訳文は必ずしも訳本どおりではない。
- ⑧ Ibid. S. 42. 邦訳(一)一八頁。
- ⑨ Ibid. S. 42. 邦訳(一)一九頁。
- ⑩ Ibid. S. 44. 邦訳(一)二〇—二二頁。
- ⑪ Ibid. S. 55. 邦訳(一)三五頁。
- ⑫ Ibid. S. 53. 邦訳(一)三四—五頁。
- ⑬ Ibid. S. 55. 邦訳(一)三七頁。
- ⑭ Ibid. S. 55. 邦訳(一)三七頁。
- ⑮ Ibid. SS. 59—60. 邦訳(一)四三頁。